

教職大学院

Newsletter

No. 25

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.09.30

深い「子ども理解」から高度実践構想力へ

北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻教授 庄井良信

北海道教育大学の大学院・学校臨床心理専攻には、多くの現職教員が在籍しています。自己の成長のための「問い」や、現実の複雑な問題に関する切実な「問い」を抱いて入学し、厳しい職場で激務をこなしながら受講している院生も少なくありません。待たなしの深い現実を背負いながら、夜間を中心に講義や演習を履修しつづける日々は、想像を超える困難の連続であると思われま

す。講義・演習や修士論文指導は、夜6時から9時過ぎの時間になります。「おつかれさま、今日もたいへんだったでしょう」と声を交わし合い、一杯のお茶をいただきます。窓の外に吹雪く夜景を見て、互いに深呼吸をします。そこには、等身大の自分の言葉で語り合うことが許される独特な創造空間が生まれます。私たちはそれを「物語共同体：narrative community）」と呼んでいます。

困難の多い社会に傷つきながら懸命に生きている子どもや親（保護者）や教師たちの一回性の声を聴きとること。当事者のつらさやせつなさ心に寄せ、教師の「自己物語」をまずは徹底して聴きとること。私たちは、これらの営みを「臨床教育学」の学びと研究を支援するための第一歩だと考えてきました。そして、現職教員＝院生の学びと探究の軌跡に伴走する支援・指導を、以下のようなプロセスで進めてきました。

- ① 厳しい教育現実を生きる教師の「自己物語」を丁寧に聴きとる。
- ② その教師にとっての根源的な問い（実存的な問い）の発見を支援する。
- ③ その問いを臨床教育学の基幹となる概念（母概念）と往還的に切り結ぶ。
- ④ 学術上に位置づくような「生成的問い」（generative questions）を立ち上げる。

- ⑤ 生成的問いを研究の「大枠の仮説」として設定できるように支援する。
- ⑥ その「大枠の仮説」を導きの糸として、自己／他者の教育実践を対象化する。
- ⑦ 実践でその仮説を検証しつつ「新たな仮説」が発見できるように支援する。
- ⑧ 仮説を理論化し、臨床教育学の構想概念として一般化する。

ある中堅教師は、このようなプロセスで進められた修士論文構想の場における内的体験を、次のように語ってくれました。

「この研究室に入ると、何かホッとします。ここで私の話を一緒に考えて下さると、自分の周りに保護された空間と言うか、周りの雑音がすっと消えて、一緒に話している事柄の世界に入れると言うか…集中力がぐっと高まって行く。その空間の中で、職場では浮かばなかったことが、『こんな言葉や視点で考えてみたらどうだろう』と言われたことによって、ふっと思いが浮かんできたりする。私にとっては、これがすごい体験だったと思います」。(中学校勤務)

もちろん、現職教員である院生が、自分なかに揺れ動く感情に触れながら、そこで生成しつつある問いを、深い学びや探究の軌跡へと架橋していくことは、決して容易な仕事ではありません。指導教員から一方的に与えられることも、巧妙に誘掖されることもなく、院生自身の揺れる感情と響きあう問いを発見し、それをある学問的・学術的テーマへと結晶させていくプロセスは、現職教員＝院生にとっても、大学教員にとっても、深い葛藤を伴う自己格闘の日々にならざるをえないでしょう。しかし、みずからのアイデンティティをかけたこの知的格闘こそが、その後の教師の成長と専門的力量（深い「子ども理解」にもとづく高度実践構想力）の涵養を根底から支えることになるのだと思うのです。

内容

深い「子ども理解」から高度実践構想力へ (1)
拠点校だより (5)
平成22年度の更新講習（必修領域）を終えて (11)

夏の集中講座を終えて (2)
中教審・教員の資質向上特別部会の行方 (10)
拠点校研究会案内 (12)

夏の集中講座を終えて

今年も夏の1カ月間、教職大学院の夏期集中講座が開かれました。岸野先生と4名の院生からいただいた報告をここで紹介させていただきます。夏期集中講座における学習と省察の様子に触れていただければ幸いです。

福井大学教職大学院 岸野 麻衣

猛暑の夏、3日間×3サイクル、計9日間にわたる集中講座を終えました。福井大学教職大学院の夏期集中プログラムは、サイクル1で長野県の伊那小学校や富山県の堀川小学校をはじめとする実践記録を読み解き、サイクル2ではウェンガーやショーンなどによる組織や実践者の成長に関する理論書と向き合い、サイクル3ではこれらを踏まえて自身のこれまでの実践の展開を書くという構成となっています。いずれのサイクルでも、院生がそれぞれ読んだり書いたりする時間と、小グループで語り合う時間が組み合わされており、このような構成の中で、個々の院生がじっくりと課題を探究できるよう十分な時間を保障し、他者と出会い、語り合い、聞き合うことで、自身の思考を明確化し深めていける場を作っていければと考えています。

集中講座の間、ある院生が「日々学校でやっていることにどんな意味があるのか、ここに来なければこんなに考えなかった」と言うのを聞きました。学校ではどの先生もより良い実践を求めて様々に試みているのだと思いますが、その意味を問い直して言葉にして改めて考えてみるということは少ないかもしれません。

グループで語り合う中では、子どもの体験や思いに寄り添って展開されていく授業記録をめぐって、「理想であって、現実はそのほかない」という話題も出ました。確かに、それぞれの現場に様々な制約があるのだと思います。そこに「そもそも授業で何を指すのか？ 教師はどうあるべきなのか？」と問い直し、もう一度考え直してみる、一石を投じる、というような時間になったように思います。

理論書を読むサイクルでは、「使える」知識や情報を掴み

取りするための本とは違いなかなか理解しにくく苦勞しながらも、必死で自分の実践に結びつけて読み解こうとする院生の姿が随所に見られました。そうすることで、異なる視点から自分の実践を改めて考え直すことにつながっていたようです。

「学校で仕事をしているときに比べると、集中講座では身体はそれほど動かさないし終了時刻も早いのに、1日が終わるとぐったりして他に何もできない！」と嘆く院生には、同意の声が次々あがりました。この集中講座の間、いかに自分の実践にじっくりと向き合っていたかがうかがえる話です。

教職専門性開発コース(ストレートマスター)のある院生のレポートには、「同じグループになったスクールリーダー院生の『よくわからないけどやってみよう』と前向きに取り組む姿勢を見習いたい、その笑顔を見習いたい」と書かれていました。グループで語り合う場は、単に実践内容を互いに知り合うとか自分の実践を考え直すとかいうレベルを越えて、一人一人の探究が重なり合い響き合う場にもなっているようです。また秋以降が楽しみです。



スクールリーダー養成コース1年/越前市武生第三中学校 坂下 博行

「答えは自分(自分たち)の中にある」

教職大学院で学ぶようになって5ヶ月、自分の実践を省察し、大学院の先生方や院生の方と話をしていく中で、こんなことを思うようになりました。この夏の集中講座でも、いく

つもの気づきを得ることができました。そのうちのいくつかを紹介します。

1. 院生同士が協働することの良さ

夏休みに勤務校の校内研修として、授業づくりについて気

軽に話しあってみようという「みつつの会」という企画を準備していました。Cycle2のクロスセッションの際にこの企画のことを話題に出すと、同席した富永先生や竹内先生、富澤先生から、改善のアイデアをいただきました。もともと私が考えていた原案では、立ち上げの会の割には難易度が高すぎたのです。いただいたアドバイスをもとに企画を修正して実施したところ、本校の教員からも好評となり、第二回目も実施できそうな手応えを得ました。教職大学院の良さは、こうして院生一人ひとりの取り組みに対しても、協働ができるところだと思います。

2. 自分のライフステージを振りかえることの大切さ

Cycle3の「実践研究の方法と組織」の中で、私は自分の23年間の教員生活をじっくりと振り返ってみました。前任校で研究主任を務めていた頃の失敗、その失敗を糧にして取り組

んだ昨年度の研究発表会での研究主任として心掛けたこと、社会科教員として大きな学びを得たこと、伴走ボランティアの取り組みを組織したこと・・・etc. 今の自分を形作っているのは、うまくいったことも失敗したことも含めて過去の自分のさまざまな取り組みであり、同僚や上司との出会いであることを改めて認識することができました。

3. わが校は「潜在期」から「結託期」へ

Cycle2の際に『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み解く中で、わが校はウェンガーがいうところの、実践コミュニティの「潜在期」を終え、「結託期」を迎えつつあると感じました。この時期の主要な課題は「コミュニティが一つになるために必要な活力を生み出すこと」だとあります。今後は夏の集中講座で学んだことを活かして、そのための手だてをとっていきたいと考えています。

4月からの実践を省察し、意味付けができた夏期集中

教職専門性開発コース1年 佐々木 庸介 (福井市至民中学校インターンシップ)

私は現在、福井市立至民中学校でインターンシップを行なわせていただいています。夏期集中講座では、自分自身の学びの過程を捉え直して表現し、先生方に語ることで自らの考え方を発展させることができました。私の考えが大きく変化したのはサイクル2でウェンガーらの『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み、自分の行ってきた実践に照らし合わせた時でした。学部時代には「探求ネットワーク」に所属し、子どもたちに探求する力などを育むために何を行うべきかを同じ大学生と討論してきました。4月の段階では、この実践が私の学びの中でどのような意味を持つかがわからず、その価値を語るできませんでした。しかし、『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読み、グループ討議の中で先生方と話し合うことによって、探求ネットワークは「子どもたちのコミュニティをどのように形成していくかを学び合うコミュニティ」であったのではないかと、実践に意味付けをすることができました。これによって、インターンシップにおいても自分がどのような価値観を持って生徒とかかわっていたのかについて気付かされ、自分が行ってきた実践を捉え直す準備にもなったと思います。

サイクル3では、実践記録のたたき台を作ることで実践の展開を振り返ることができました。まず、サイクル2で得た

「大学院に入るまでに自分が学んでいたことにどのような価値があったか」についてまとめ、次にインターンシップでの記録や、メンターの先生からのコメントを振り返ることで、自分の学びがどのように展開していったのかを考えました。すると、自分の学びが深まった場面には、背景があることに気づきました。例えば、当初は専門教科である理科の授業しか参観していなかった私が、同じく至民中学校にインターンシップとして参加している森崎と共に社会の授業も参観し、授業について語り合うことで学びを深めていくようになりました。この変化の背景には、6月のラウンドテーブルにて、福井県特別支援教育センターの大崎先生がなされた実践報告の「同じ実践を共有し、語り合うことの大切さ」についての話があったのです。このように夏期集中講座では自分がどのような考えを持ってインターンシップに臨んでいたのかを振り返ることができ、そして学びの背景があることを再認識できたことで、今後の学び方をも捉え直すことができました。私の学びを支えてくださるメンターの先生、至民中学校の先生方、教職大学院の先生方、同じ院生、教職大学院で学ばれている現職の先生方に改めて感謝しながら、今後も自分自身を高めていきたいと思っています。

スクールリーダー養成コース2年／小浜市立西津小学校 勝見 浩文

夏期集中講座は中身の濃い9日間だったと思います。また、私にとっては現場を離れ、ゆったりとした時間の中で、自分を見つめ直す良い機会でもありました。

サイクル1では「学ぶ力を育てる」(伊那小学校)を読み、特に「学びの芽は生活の中にある」という言葉に感心しました。自分のこれまでの教員生活をふり返って、子どもの学びの機会を奪ってきたことを反省するばかりでした。また、サイクル2で「省察的实践とは何か」(シヨーン)を読み、教職大学院でする自己紹介やカンファレンス、クロスセッションが、自分自身や実践をいろいろな視点から省察するために行っていることを、やっと理解することができました。そして、サイクル3では、これまでの夏期集中講座と前期のセッションを踏まえて、自身のこれまでの取り組みをふり返り、省察したことをレポートにまとめ、発表し合いました。発表していただいた方々の紆余曲折しながらも努力する姿を感じ取り励みになりました。また、自分の実践を文章にまとめ発表し、発表に対して感想をいただけたことで、より深く客観的な省察ができたと思います。ミニゼミで講義していただいた、3人の先生方のお話

も印象的で、自分の考え方を広げてくれるものでした。

ところで、小浜市に住む私にとって、夏期集中講座に参加することは、大学院や講座の中の小グループという公的なコミュニティの他に、もう1つ、私的なコミュニティに参加することになります。私同様、遠距離通学になるため、ホテルなどに宿泊する先生方と作るコミュニティです。夕食を介しながら、その先生方と語り合うのですが、内容は講座で話していたことの続きであるとか、自分の学校での取組について等です(もちろんそれ以外の話もしますが…)。昼間のカンファレンスやクロスセッションと同様、深く省察させられます(私の場合、覚えていないことが多いのですが…)。『コミュニティ・オブ・プラクティス』の実践コミュニティ育成の7原則の中に「公と私それぞれのコミュニティ空間を作る」ことが挙げられていましたが、まさにこの事かなとまじめに考えたりします。

昼も夜もいろんな先生方と語り、そのことで自分を見つめ直したり、刺激を受けたりしたことで「今の自分より少し成長した自分を目指そう、それが学校の役に立てばいいな」そんなことを考えた夏期集中講座でした。

スクールリーダー養成コース2年／坂井市立長畝小学校 多田 敏明

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コース2年目の多田敏明です。早いもので、入学して1年6ヶ月が経とうとしています。今年の夏期集中講座の9日間でも、多くのふり返りと同僚との関係や組織について考えることができました。

Cycle1では、堀川小学校の研究実践「生き方が育つ授業」を読みました。授業の中で子どもたちの思考や活動が丹念に記載され、子どもたちの意識や内面からのアプローチを主体とする授業の大切を改めて知りました。また、その後の話し合いの中では、同様な実践を読まれた若い院生の方の「子どもの思考を大切にしたい」「自分の授業をもっと変えたい」という熱い言葉に大変刺激を受けました。自分自身も以前はこんな思いを抱いていたはずだと気付きました。長年の経験のみで毎日を過ごしている自分にとっては、自分の授業をふり返るよい契機になったと思います。

Cycle2では、ピーターセンゲの著書「学習する組織」を読み、本校の現状と照らし合わせて考えてみました。その中で、組織を成長させる最も基本となるものは、各自の「自己実現」であると感じました。各自がそれぞれのビジョンをもつこと、また、組織はそれらのビジョンを理解し支援、活用することで成果も上がっていくのではないかと考えました。

しかし、昨年までは、こうした取り組みに戸惑いやその

意義について疑問を感じることもあり、先が見通せないまま時間が過ぎていったようにも感じました。頭の片隅には、「これで成果が上がるのであろうか。」「本校の取り組みはこのままでよいのだろうか。」「来年までには結果が出せるのであろうか。」などと、先のことばかり気にしていたように思います。

なんとなく肩の荷が下りて気持ちが楽になったのはCycle3の頃だと思います。話し合いの中で、これまでの自分の拙い実践や課題などをそのまま認めてくれる雰囲気を感じたからです。「それなら、この本を読むといいですよ。」と参考となる図書(『学び』で組織は成長する:吉田新一郎著)を薦めてくださる先生もいました。自分なりのビジョンが支援された思いがしました。話し合いのメンバーは、大学院の先生や他校の先生、若い大学院生など立場や年齢、校種も違っていました。同じ職場の同僚のように聞き合ったり思いを素直に語り合ったりする雰囲気を感じました。単に少人数で集まって報告し合うだけではなく、同僚の思いや考えを感じ取り、それを自分のこととして捉えていけるような本質的な「学び合い」が大事であることに気付きました。成果を求めずに同僚のよさを認め合い、それを活かしていけるような学び合いをこれからの本校の研究に活かしていきたいと思いました。

拠点校だより

嶺南教育事務所は、小浜市の東、遠敷地区に位置しています。事務所の前には「若狭の里公園」があり、その隣には「若狭歴史民俗資料館」があります。大変静かな落ち着いた環境で、研修機関として最適な条件に恵まれています。

平成8年4月、機構改革により、「若狭教育事務所」「教育研究所若狭支所」「嶺南へき地複式教育センター」「特殊教育センター嶺南駐在」が統合されて、現在地に当事務所を設置するとともに、敦賀合同庁舎内に敦賀駐在が置かれました。

ここ嶺南教育事務所の教育方針として、「郷土に対する愛着や誇りの涵養と、生きる力をはぐくむ教育の推進」「国際感覚をそなえ、人間性豊かで創造性に富んだ人材の育成」「総合的な学力の向上、人権意識の高揚、生徒指導の充実」「一人一人の教育的ニーズに応じた支援活動の充実」「教職員の資質能力や指導力の向上および今日的課題をふまえた教育の実践的研究」の5つを掲げています。この方針のもと、「総務課」「指導相談課」「特別支援教育課」「研修課」の4つの課でそれぞれの業務に取り組んでいます。

その中で、私が所属する「研修課」の業務を中心に説明します。研修課の主な業務として、「研修講座の企画運営」「教育課題の解決に向けた調査・研究」「校内研修支援」「教育図書・資料等の収集整理、情報提供」があります。「研修講座の企画運営」では、嶺南地区小中学校教職員のために今年度は39講座を用意しました。すでに3分の2以上が終了していますが、過去最高の数の受講申込となり、多くの先生方に研修を受講していただきました。特に夏季休業中は35℃を超える猛暑にもかかわらず、熱心な学びがたくさんありました。「教育課題の解決に向けた調査・研究」については、5名の研究員が嶺南地区の教育課題の解決に向けて研究を進めています。来る平成23年2月3日の嶺南教育事務所教育研究発表会での発表に向けて、研究協力校での研究実

福井県教育庁嶺南教育事務所 研修課 辻村 完

践をもとに、課内での検討会や所内での中間報告会を行うなど着実に研究を進めているところです。この研究発表会に多くの御参加を期待しています。その他の業務につきましても順調に進んでおります。

今年度の研修課のテーマは「協働・創造」です。このテーマのもと、「目標を持つ」「チームワークを大切にする」「風通しを良くする」「評価により改善を図る」ことを具体的な行動目標として、日々業務に取り組んでいるところです。教職大学院の拠点校になってから、所内カンファレンスを実施するようになりました。年4回、教職大学院の先生にお越しいただき、研修課全員と、時には所長・次長も出席して研究員および私の研究について研究協議を行っており、「協働」「同僚性」「省察」…などの教職大学院での実践が研修課内にも浸透してきています。月1~2回の課内会議や課内研修において、以前にも増してそれぞれの意見が出されるようになり、より深い部分までの検討が行われています。課員全員が自分事のように捉えて意見を出し合い、みんなでよりよいものをつくりあげていこうとする雰囲気が出来上がっています。このような取り組みの心地よさがあったか、会議や研修ではいつも時間オーバーになるくらい白熱した意見のやりとりがあります。

さらに、研修課だけでなく事務所全体での「協働」も充実していきたいと思っています。所員のチームワークは最高で、年数回実施している事務所全体の事業においては、企画がしっかりできており、突発的な内容に対してもそれぞれの所員の判断で適切に対処しています。まさに「協働」を感じるところです。嶺南地区の教育をさらに充実させることを第一の使命として存在する当事務所が、今後「協働」においても模範となるような拠点を目指していければと考えています。

坂井市立丸岡南中学校 渡邊 朋重

本校は、平成18年4月に全国屈指のマンモス校であった丸岡中学校から分離新設した、開校5年目の新しい中学校です。県内初の教科センター方式を採用した学校で、他にもメディアスパイラル方式で建てられた斬新な校舎、全校生徒が一堂に会して取るクックチル方式の給食、そして異学年縦割り集団であるスクエア制を中心とした生徒会活動といった特色を持っています。

すべての教科が専用教室とメディアセンターを持ち、教材を常設したり、生徒の作品を掲示したりすることで、教科特有の学習環境を構成し、生徒たちが学びの過程を知ることができます。メディアセンターは各室に開かれたオープンスペースで、図書・プリント・資料・情報機器などが用意され、授業で使ったり、生徒が休み時間に自由に使ったりしています。また、各教科の教員が常駐し、生徒の相談に気軽に応じたり、生徒の自主的な学習を援助したりする場となっています。

メディアスパイラル方式とは、学校の中心である図書館を起点として、中庭を囲みながら立体的・連続的に多目的ホール、コンピューター室、ランチルームなどのオープンスペースや各教科のメディアセンターをらせん状につなげた方式のことです。廊下はすべて行き止まりのない設計になっており、単なる移動するための空間ではなく生徒の居場所であり、生徒同士や教師との出会い、コミュニケーションができる生活空間としての豊かさを生み出す場として活用できるようになっています。

集団の中で自主性と自律性を育てることを目的に、スクエア制と呼ぶ異学年集団による活動を取り入れています。ホームルーム配置を学年をばらして4つにまとめ、それぞれ「花」「鳥」「風」「月」と名付けたスクエアを構成して

います。年度初めにはレクレーションを中心とした「スクエアDAY」が設けられ、学年の壁のない楽しい1日を過ごしています。毎日の

清掃や給食、体育祭や文化祭等の学校行事の他、特別活動においても、内容や目的に応じてスクエアによる活動を行っています。また、各スクエアから選出されたスクエアリーダーが生徒会執行部として活動しています。

また、本校では、開校以来3年間を一区切りとして自主研究に取り組んできております。昨年度は、研究主題を「学び合う環境の創造」と設定し、2回目スタートさせ、11月に研究発表会を開催したところでございます。本年度は2年次として、「授業づくり」を中心に、「グループによる少人数での学び合い」に焦点をあてて研究・実践をすすめております。今年度からは研究主任の私が、福井大学の教職大学院で学ばせていただいております。拠点校としての連携協力をはかっているところです。特に今年度は、教員同士の学び合い、という視点にも力を入れており、教職員同士が授業を公開し合い、共に学んでいく学校文化を醸成していきたいと考えています。まだまだ拙い研究ではございますが、今年度も11月2日(火)に自主研究発表会を開催いたします。是非、たくさんの方々に参加いただき、ご指導いただき、ともに学び合いたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。



スクエアDAY



メディアセンター



多目的ホール



ランチルーム

福井市豊小学校 宇野 泰裕・笠川 誠二

教職大学院を修了して、早くも2年がたとうとしています。年を追うごとに多忙感が加速化する中で、スクールリーダーとして修了した笠川、宇野の両名共に子どもの顔が輝く場面を数多くつくるために、また学校全体でそんな子どもたちと日々向き合う先生方と励まし合い、支え合って充実した学校生活を送っています。

本校では、平成20年度より研究主題「共に学び合い、くらしに生かす子どもたち」の下、見通しをもち、学びを活用する子をめざして授業改革を中心とした自主研究を継続しています。

前回、平成20年度の研究発表の反省と課題から、昨年度からは次の3点を研究の重点項目に掲げて研究を推進しています。1つめは、「主題探究型の単元構想を生かした学びに見通しをもち、一人一人が主体的に学習に臨む授業づくり」です。子どもにとって学習の流れがわかり、ゴールが見える学習過程を構想するためには、教師自身が単元でつきたい力を明確にした上で、生活の中から学習課題を引き出し、解決のための学習活動を構成することが主体的な学びにつながると考えています。結果として、生活の中から導き出された学びがさらに自らの生活や生き方に還元される学習こそが活用力であるとも考えられます。

2つめは、「表現力・活用力を育てるための言語活動の充実」です。本校では、以前より話し合い活動を重視した授業改革を進めてきましたが、さらに話すことと書くことをより綿密に関連させて、より根拠を提示しての論理的な説明や相手意識を持った意見、感想交流の場の設定を考えています。

3つめは、意見、感想の交流の場設定とも関連して、一人一人の思いや考えが生きる伝え合いを重視した学習活動のためには少人数や小集団でのグループ活動など話し合いの場の多様化が求められます。その話し合いの場を授業のみならず委員会や集会活動、そして学校行事などのあらゆる場で生かすこともまた「活用力」だと考えています。

さて、自主研究発表会を11月に控え、少しずつ緊張感が高まってきました。自主研に向けての事前研究会も、7月下旬から部会毎に数回行っています。本校では、子どもたちの発表やつぶやきを大切に授業を心がけています。それらを効果的に取り上げ、子どもたちにさらなるゆさぶりをかけるなどして、深まりのある授業にできると考えるからです。そこで、1回目の事前研究会では、試みに、実際に授業をするような形で先生方に本時の授業について理解



してもらおうようにしてみました。指導案を見ずに、先生方は発問に対して子どもの立場で一生懸命に考えます。おかげで



子ども達が考えるであろう多様な考えが出てきましたし、中には授業者が予想し得なかった考えもいくつか出てきました。正解だけでなく子どもが陥りやすい間違いを考えて答えてもいただきました。もちろん指導案を見ながらの検討でも同じような意見が多く出るのでしょうか、この方法を採用することで討議がより活発に行われることにつながったような気がします。参加した先生からも、「指導案で説明を聞くよりも、授業の様子がよく分かり、授業者の意図も理解しやすい。」「経験に左右されることなく意見が出しやすい。」などの感想が聞かれ、大変好評でした。このことから、一つの事前研究の方法として、おもしろい試みだったと感じています。

授業後の研究会の持ち方も工夫してみました。大人数で研究会を行った場合、いくつか問題点があります。意見が出にくいと感じる人も多いでしょうし、何よりも限られた時間の中で全員が発表することは不可能に近いです。そこで、話し合いの時間を2つに区切りました。まず6人前後からなる小グループで話し合います。この時間が10分程度。その後、全体での話し合いに移ります。この時間は40分程度。全体での話し合いでは小グループで話題になった意見が出され、さらに深まりのある話し合いがここでなされます。教職大学院で学んでいらっしゃる先生方には、小グループでの話し合いが有効であることは経験済みでしょう。10分では短いような気もするでしょうが、それだけの時間でも、後の全体の話合いがとても有意義なものになると思います。でも少し考えてみると、この方法はふだんの授業でよく行っている形と同様であることは興味深いところです。

今回紹介した2つのことは、豊小学校の子どもたちの思考に即した学びを大切に授業を目指す姿勢から生まれたものと言える気がします。

今年度は、この3つの重点項目をより具体化するための方策を探りながら「国語の読解力」、「算数の活用力」をより高めるための授業研究を進めています。その成果は、11月10日(水)に行われる自主研究発表会で広く公表することになっています。2年ぶりの研究発表になります。多くの先生方の参観をいただき、子どもの目線にたち、子どもの発言を読み解きながら、子どもを見取る確かなまなざしと手立てを養うため、さまざまなご意見、ご指導をいただきたいと考えております。

福井県教育研究所 西村 美貴穂

教育研究所は、平成20年度から教職大学院の拠点校の一つとして、協働研究に取り組んできています。平成20・21年度は、「研修機関としての研修・支援機能の充実」を研究テーマとしました。それまで研究所では、個々の所員が研究を行っていましたが、組織的な研究体制は充実していませんでした。このような状況の中で、教職大学院との連携により、協働研究会を立ち上げた意義は非常に大きかったと思います。

市内で年間10数回行う協働研究会では、「現場から研究所に求められていることは…」、「今年度実施の研修講座の課題は」などのテーマを毎回設定して、グループ協議を行ってきています。研修講座の受講者へのアンケート結果から、講座を改善するための方策について協議したり、講座担当者としての振り返りを報告し合ったりしてきました。所属課や校種が入り交じったメンバーで協議することにより、新たな見方やアイデアを共有することができ、また、所員同士のコミュニケーションを深めることにもつながっています。

今年度の研究テーマは、「学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用」です。学校訪問研修を拡充することにより、校内研修を活性化し、学校の協働体制づくりを支援していこうとするものです。これまでも訪問研修として行っている教育相談、情報教育、理科実験などに加え、授業研究会、白川文字学を活かした漢字学習、小学校外国語活動、図画工作、書写などについての訪問研修を新たに開発していこうとしているところです。

教育研究所には、教育研究所ならではの課題があります。それは、4つの課（教職研修課、教科研修課、科学情報課、教育相談課）に分かれて業務を行っているのですが、学校のような職員会議もなく、意思の疎通が図りづらい面があります。また、行政機関なので、学校現場とは異なる仕事環境のために、所員は様々なストレスを抱える場合があります。これらの課題を踏まえて、協働研究会の運営で工夫していることを以下に紹介します。

まず、協働研究会の運営を支える組織として協働研究プロジェクトチームがあります。各課から集まった9人のメンバーからなり、協働研究会の進め方などについて事前に検討します。また、各課の取組みや課題を出し合う中で、研究についての共通理解を図るようにしています。

次に、協働研究会では、ほぼ毎回グループ協議を行うようにしています。50人を超える全体会では、協議は深まりません。グループでの少人数の方が、参加者の発言回数が多くなり、協議も深まりやすいからです。グループのメンバー構成は毎回変え、4つの課の所員が混じるようにしています。いきなり「話し合ってください」では、スタートが切りにくくなります。そこで、グループ協議の冒頭で

は、毎回アイスブレイクを行うようにしています。「すっかり春らしくなってきました。今日のお題は、春と言えば〇〇です。春を感じる出来事、場所、食べ物などについて、所属課とお名前の後、1分で話してください。」アイスブレイクでは、できるだけ研究のテーマとはかけ離れたことを提示するようにしています。「自分の干支を身振り手振りで伝えましょう」「私の好きな福井弁」など、肩の力を抜いた場での話には、ふだんの仕事では出にくい、その人の性格、人柄などが表れてきます。

さらに、グループ協議のテーマについてです。研究会なので、多くは所全体の研究内容に関連したテーマを設定します。しかし、所員同士の



コミュニケーションを図りながら、研究所内の風通しを良くしていくことも必要です。グループ協議も、時には肩の力を抜いて行いたいと思います。今年4月のグループ協議のテーマは「年度初めの不安、ストレスを解消するには」でした。日頃の業務の中で、「こんなこと聞いていいのだろうか」と不安を感じながら、何となくやり過ごしてきているものです。それぞれが感じていたことが、こうした場で共有されます。2年目、3年目の所員も、自分もそうだったと共感できるのです。このようなやりとりを通して、互いの仕事を理解したり、課題を共有して解決策を話し合ったりできるものです。研究テーマとは多少離れた内容であっても、結果的に、研究に結びついていくこともあると感じています。

以上のように取り組んできた成果として、研究所全体の協働体制が整いつつあると感じています。昨年6月から教育研究所のホームページ上で「教材研究支援システム」の運用を始めました。この中の教材の多くは、学校現場の先生方の協力の下、各課の所員が連携して作成したものです。また、研修講座の運営をはじめ、様々な業務や課題を解決していく過程において、課を越えた協働の学びが生まれています。

11月17日～19日に、福井で研究所関係の全国大会が開かれます。分科会ではグループ協議を行い、そのファシリテータを当所の所員が行うので、目下、そのための勉強会や準備を行っているところです。協働研究会で育んできた教育研究所の協働体制を、全国大会成功のために活かしたいと思っています。

福井東養護学校 戸田 典子

1 本校・五領分教室の実態

福井東養護学校には、本校（福井県立病院，福井県こども療育センターに隣接），五領分教室（福井大学医学部附属病院内）および月見分校（福井赤十字病院内）があり，各医療機関と連携を取りながら教育活動を行っています。

本校では，病弱および肢体不自由の児童生徒が学んでいます。県立病院小児科病棟に入院している児童生徒，こども療育センター内の肢体不自由児施設つくし園で生活している児童生徒，および諸医療機関等で治療を受けながら自宅から通学している児童生徒がいます。児童生徒の病気や障害の程度は様々で，病気の治療や回復に伴って転入・転出するため，在籍期間も様々です。このような児童生徒に適切な教育活動が進められるよう教育課程を編成し，指導内容や指導方法を検討しながら実践を進めています。病弱・肢体不自由部と重複障害部の指導グループに分け，それぞれに小・中・高等部があるので，展開される毎日の授業の様子は，各学部でかなり異なっています。また，必要に応じて県立病院病棟内でベッドサイド学習も行っています。

五領分教室には，福井大学医学部附属病院に入院している小学部・中学部の児童生徒が在籍しています。登校が可能な児童生徒は，教室で小中学校に準ずる教育を受けていますが，教室に登校できない児童生徒には，ベッドサイド学習を行っています。

（9月11日学校祭では，開会式で病弱・肢体不自由部の小中高部の児童生徒が太鼓演奏を発表しました。

競技写真は，学校祭体育大会の「病弱・肢体不自由小中学部「ふうせんサッカー2010」です。）

2 校内研究・校内研修

本年度は，「一人一人の生活全体を見つめ，個に応じた支援の在り方を探る」をテーマに，各障害別部研究会を中心に校内研究に取り組んでいます。本校には，多種多様な障害の児童生徒が在籍し，ニーズも様々であるので，一人一人の子どもの生活全体を見渡し，障害特性や年齢，環境等に応じて必要とされる支援や指導は何かを明らかにする



ことが重要となります。そのために，子どもの見方を高め，支援や授業のもととなる個別の支援計画や個別

の指導計画の中身を検討し合い，授業や個のかかわり方の検討はもとより個々のニーズに応じて関係機関との連携が深まるようにケース会議の充実や連携を支える方策，仕組み作りを進めています。

また，近年，病弱教育の対象となる児童生徒の多様化が論じられてきていますが，本校も例外ではなく，様々な課題と向き合いながら教育実践にあたっています。心身症・発達障害児の理解支援をはじめ，医療的ケアを必要とする重度心身障害児への教育支援等，まさに一人一人のニーズに応じた適切な対応や支援のあり方が求められています。これまでの研究体制における研究成果を受け，子どもたち一人一人を理解し，よりよく生きていくためのニーズを見極め教育支援を行っていきたいと考えています。

校内研修の一つとして，数年前から校内授業参観期間を設け教師が互いに授業を参観していますが，今年度は，その期間を年2回に増やし，6月後半にその1回目を終えました。そのねらいは，教師の授業力アップもありますが，先述のとおり本校の児童生徒の実態が学部によって大きく異なるので，この授業参観を通して他学部の児童生徒を全教員が理解しようというの大きなねらいです。そもそも各学部の校時表が異なることで，自分の空き時間が見たい授業と合わない場合もあり，全員の参観はできませんでした。しかし，参観者，授業者の理解と協力の下，参観者の感想用紙は，授業者だけでなく全員に回覧することができ，間接的に他学部の授業の様子を知ることはできました。事後アンケートに出された意見を参考に，参観期間の時期や感想用紙などの在り方を検討し，10月に予定されている2回目の授業参観期間を更に実り多いものにしたいです。



中教審・教員の資質向上特別部会の行方

福井大学教職大学院 松木 健一

中央教育審議会の「教員の資質能力向上特別部会」は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策」について諮問を受け（6/29）、以下の事項について審議を重ねてきたが、第6回（9/14）までの論議を踏まえ、中間まとめをする段階に入った。

審議事項は、①教職生活の各段階で求められる専門性の基盤となる資質能力を着実に身につけられるような新たな教員養成・教員免許制度の在り方について（教職課程の期間・内容や教職大学院の在り方、課程認定の厳格化など）、②新たな教員養成の在り方を踏まえ、教職生活の全体を通じて教員の質能力の向上を保証する仕組の構築について（教員免許制度の見直し、現職研修の充実、免許更新制の検証など）、③教育委員会や大学をはじめとする関係機関や地域社会との組織的・継続的な連携・協働のしくみづくりについて（関係機関や地域が一体となった教員を支援する環境づくり、多様な人材の登用など）である。

審議の中で明らかにされてきたことは、「教員の資質能力を向上させるには、大学と教育委員会の緊密な連携のもとに、教員免許制度と教員の養成・採用・研修を一体化したしくみを構築する必要がある」ということであろう。つまり、教員研修と結びついた教員免許状によって、教員が生涯にわたって職能を向上させていくためのキャリアパスを示すことができるか否かが鍵になるとと思われる。

これに伴って、養成期間を4年+αに延長し、長期の教育実習を導入することで、大学での養成と採用後の初任段階の研修の滑らかな連結を実現できるか、中間段階での教員免許更新制度をどのように改善するか、熟練者の資質能力や管理職の能力を保証する制度をどのように構築するかといったことが話題となってこよう。

また現実の課題として、地方と都市部の教員採用倍率の地域格差問題、これからの10年で教員の大量退職時代を迎えることの問題、さらには、少子化時代の大学が経営策の一環として教員資格をオプションにしていることの問題等がある。これらを見逃した仕組はいたずらに混乱を招くだけであり、長期的展望のもとでこの解決をはかりつつ、制度設計をすることが求められている。

ただし、ここで忘れてはならないことは、中央教育審議会平成18年答申（今後の教員養成・免許制度の在り方について）の中で、すでにパラダイム転換が起きているということであろう。つまり教員の資質能力の育成は大学段階で実施し、教員としてのある程度の完成版を学校に送りだす発想から、教員の資質能力の育成は学校の中で、大学等の外部機関との緊密な連携の元で実行し、下って大学段階では何ができるかを検討する発想への転換である。だからこそ、平成18年答申では、教員免許状を教員としての最小限必要な資質能力を保証するものとし、教員の資質能力の向上を目指した教職大学院の創設や、免許更新制の導入が行われてきたのではないかと。

教員の資質能力の向上は、大学段階での養成をいくらいじくっても実現しない。学校の中で教員が資質能力を高めることのできる制度設計の構築から出発し、順次、大学のキャンパス内の教育までウイングを広げるしくみの構築がいま求められている。また、教員の資質能力の向上は、大学での個人研鑽をいくら重ねても、学校改革には発展しない。教員の資質能力で重要なのは、学校の中で協働を実行できる力である。これを培うことを支援するためにも、大学と学校のより緊密に結びついた制度設計が求められてこよう。

平成 22 年度の更新講習（必修領域）を終えて

長谷川 義治／教育地域科学部等教員免許状更新講習運営委員長

平成 22 年度福井大学教員免許状更新講習（必修領域）は、夏季休業中の 3 回開催をもって無事に終了した。今年度も、少人数グループ編成による話し合いを基本にした、いわゆる「福井大学方式」で実施した。今年度の概要を報告する。

1 はじめに

平成 22 年度更新講習の計画・立案は、実は、昨年 9 月ごろから始まっている。ちょうど、政権交代が実現し、「更新制度廃止」や「更新制見直し」などと報道され始めた中での準備であった。更新講習開設者として、文部科学省からの情報がほとんどない中で、県教育庁義務教育課や県総務部大学・私学振興課と連携を取りながら、受講対象者のアンケート調査を 2 回お願いした。その結果、受講者数は約 300 人の見込み。（平成 21 年度のこの段階での見込みは約 600 人）その結果を踏まえて、平成 22 年度の計画を決定し、申請・募集を行った。

2 本年度講習の変更点

本年度講習の主な変更点は、①開催回数は 7 回→3 回、②嶺南会場は小浜市→敦賀市、③文京キャンパスでは、総合研究棟→教育地域科学部 1 号館などである。

①については、1 回分の募集定員を福井会場は 120 人、敦賀会場は 80 人、合計で 320 人とし、いずれも、大学の授業日を極力避けて、夏季休業中の開催とした。

②については、昨年度の開催が小浜市であったこともあり、また、福井会場が 2 回分で 240 人がやや窮屈であることもあって、敦賀市で開催すれば、受講者の方で調整して申し込んでもらえるだろうとも考えた。実際には、福井会場の 2 回分は早々に定員に達したが、敦賀会場では、締め切り後も、しばらく、追加申し込みが続いた。

受講申込の取消等もあって、必修領域の受講者数は、最終的に、合計 291 人であった。

3 本年度講習の概要

「福井大学方式」の特徴を改めて挙げると、①必修 12 時間に選択 6 時間を加えた 18 時間（連続 3 日間）の講習、②少人数グループによる語り合い・聞き合いを基本にした「省察型」講習、③校種、年齢、教科等の壁を超えたグループ編成などである。

ただし、①については、3 日間連続で受講した者の割合は 34.4%と、昨年度実績 68.4%と比べ、様変わりであった。これについては、今後、その趣旨を受講対象者にしっかりと伝えるよう検討していかないといけないと感じている。

また、②については、今年度も、大学教員だけでは賅えないので、現場経験の豊かな現職・元職の校長・教頭に協力をお願いした。協力者数の合計は、実人数で 49 名（新規 9 名、継続 40 名）にもなった。多くの関係者に対して心からの感謝を申し上げたい。

なお、受講者評価については、「講習の内容・方法」「知識・技能の習得の成果」「運営面」の 3 項目について回答していただいているが、3 回分の「教育実践と教育改革 I」（必修）の全体平均は、「よい」が 45.2%（42.6%）、「大体よい」が 48.9%（47.5%）、「余り十分でない」が 5.6%（9.3%）、「不十分」が 0.0%（0.5%）で、昨年度を更に上回る評価をいただいた。（カッコ内は昨年度実績）



4 おわりに

受講者の受講の様子などは、昨年度以上に、「落ち着いて」いた。講義中のレポートもしっかりと記述してあるし、最終レジュメの提出も締め切り日の前日には全員分がそろそろほどであった。受講者の協力にも心からの感謝を申し上げたいと思う。

毎回、3 日目に受講者には講習全体を振り返っていただくことにしていたが、協力者から、受講者の発言メモをいただいた。その中の一つを紹介して、まとめとしたい。

この研修ほど自分を振り返ることのできる研修はあったかなあと思った。この時期に勉強できて良かった。内容的にも良かった。この 3 日間がなかったら「いつ辞めてもいい」と思う自分がいたが、「可能性・生きがい」を改めて見付けたように思う。これほど聴いてもらったことがなかった。今までやってきたことが無駄ではなかった。これから、学校内でも自分を出していきたい。（53 歳、小学校教諭）

10/8

(金) 9:30-15:30

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 2010年度公開研究会

自分らしく生きる学びの創造 (3年次)

～子どもの成長の筋道を協働でたどる～

〒910-0065 福井市八ツ島町 1-3
TEL 0776-22-6781 FAX 0776-22-6776
E-mail : yokyo22@f-edu.u-fukui.ac.jp

10/29

(金) 9:20-16:50

福井市至民中学校第3回公開研究会 学びと生活の融合

—異学年型教科センター方式を運営する—

〒918-8032 福井市南江守町 65-20
TEL 0776-35-3840 FAX 0776-35-8012
http://www.fukui-city.ed.jp/shimin-j/
E-mail :shimin-j@fukui-city.ed.jp

坂井市立丸岡南中学校自主研究発表会

学び合う環境の創造 (2年次)

〒910-0355 坂井市丸岡町高瀬 15-2
TEL 0776-67-7722 FAX 0776-67-7122
http://www.maruokaminami-j.ed.jp/
E-mail : info@maruokaminami-j.ed.jp

11/2

(火) 13:15-16:30

福井市豊小学校自主研究発表会

共に学び合い、くらしに生かす子どもたち

～見通しをもち、学びを活用できる子をめざして～

〒918-8011 福井市月見 3-9-1
TEL 0776-36-3802 FAX 0776-36-3803
http://www.fukui-city.ed.jp/minori-e/
E-mail : minor-e@fukui-city.ed.jp

11/10

(水) 13:00-16:30

☆☆福井大学教職大学院がテレビの全国放送で紹介されました！！☆☆

去る7月20日(火)、TBS系列の夜のニュース番組にて、教職大学院長期インターンシップの様子が約9分間のVTRで紹介されました。インターネットの番組サイトで動画を見ることができます。ぜひご覧くださいませ。

TBS『ニュース23クロス』「特集 学校が変わる(2) いい先生をどう育てる？」

<http://www.tbs.co.jp/news23x/feature/series08.html> ※ページ左下「動画を見る」をクリック！

Schedule

10/23 sat 合同カンファレンス(9:30-12:30)

11/27 sat 合同カンファレンス(9:30-12:30)

【編集後記】 猛暑の夏を無事に乗り越え、近頃は秋の訪れを感じられる日が続いています。今号は、拠点校紹介に加えて、今夏に実施された免許更新講習の報告、松木専攻長が参加される中教審特別部会報告と、さらに盛り沢山の内容となりました。なによりも、活発に学びが展開された夏期集中講座の各ご報告はいかがだったでしょうか。今号の報告がまた皆様の日々の実践の省察を促す、そうした媒介項となるよう願っております。(篠原岳司)

教職大学院 Newsletter **No.25**

2010.09.30 発行

2010.09.30 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpd@fukui@yahoo.co.jp